

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

我が奮闘記

宮崎県 日高 亮 明

それは遠い昔の思い出となりましたが、その思い出をたどることが私の人生でせめてもの慰めでもあり、永遠の平和の礎として後世に戦争の悲惨さを伝える義務ありと信じ筆を執ります。

私が渡満したのは大正十五年七月で撫順中学校一年生に転入しました。そのころの撫順は大露天掘りを拡張するため、旧市街を新市街地に移転する世界でも類を見ない大偉業を実施中でした。すなわち駅、病院、学校、商店街、支那街、その他市街地に付随する警察、郵便局、神社仏閣、ホテル、各事業所などが新しく整然と区画された新市街（現在の撫順市）に移転しました。黒ダイヤの街、撫順が持つ特異性はあるが満鉄の

偉大な力と、満鉄の会社員上下一体となった強固な団結によってこそ初めて、この豊かな生活と美しい環境が造られたのである。

新市街は駅を扇の要として永安大街、中央大街、千金大街の主要道路に一条通りから十条通りまで、網の目に道路が交錯し市街の美観、道路と並木の素晴らしい調和、そして満鉄社宅は小高い丘の上にこれも環状的に建てられ、家庭にあつてはガス、暖房設備は完備し、零下三十度の極寒にも浴衣一枚でビールを飲み、いつでもコックをひねれば熱湯がほとばしり、風呂と洗濯も思いのまま、社宅の前後には畑を耕し草花を植えて四季の移り変わりを愛でられた生活、まさに別天地のような理想郷社会が築かれていました。

これすなわち精根尽くした日本人の努力と中国人の力強い忍耐と在住両国民の相互信頼に基づく合作のたまもの以外何物でもなかったことを理解し、今後は戦前に残された業績に中国の新風を吹き込み東洋に誇る大撫順市の発展を祈ると共に、いささかでも我々の努力が中国の新しい発展に寄与し得た喜びを終生の誇り

として生きたいと思う。

さて敗戦後の撫順在住の日本人は避難民共々留用され、長い人は五年もいろいろな苦難を乗り越えて撫順の石炭を守って働きつづけた。敗戦によって追われた日本人は身一つ、思い出の写真すら持ち出せぬまま、乞食同様祖国へ引揚げた。

それでも内地に引揚げ出来た者は恵まれたというべきで、食べる物もなく家もなく、至る所で犯され奪われ、叩きのめされ大陸の土と化した何十万の避難民がいることを。

戦後四十数年を経過して今は怨念を越え、満州の大地には日本人の血肉と幾十万の魂が眠っている現実に思いをいたし、新生中国の発展とアジアの平和存続を祈りたい。

旧市街には中学校はなく、永安台に仮校舎が建てられ三年間先輩は勉強して大正十五年四月新校舎に移りました。私たちは一年生から新校舎でした。校舎はれんが造り三階建の立派なもので、別棟に雨天体操場ありグラウンドは四百メートルのトラックが整備され、

野球に陸上競技などに若い力を燃やすことが出来ました。甲子園目標に一年生から硬球で鍛えられました。

修学旅行は北京でしたが、満州事変前で治安は悪く、北京までの列車の窓下には排日ポスターが全列車に掲げられ、北京の城壁の上にも「打倒帝国主義」とか、日本人が下駄で中国人を踏みつけている絵とかの大きなポスターが貼られていました。しかし楽しい修学旅行でした。というのは撫順女学校も同じ旅館でまた帰りの塘沽より大連までの船も一緒で、めったにない機会でした。北京中学校と野球試合で親善をはかり、東安市場の遊技場には今流行のボーリング場があったことなど、思い出は一杯です。

昭和五年撫順にも馬賊が襲来、銃撃戦が行われ、昭和六年九月十八日満州事変勃発し昭和七年の何日か紅槍会匪、大刀会匪の襲撃あり、東郷、老虎台採炭所が襲われ、何人かの尊い犠牲者が出た。それから間もなく楊柏堡事件すなわち平頂山事件となる。部落の住民老若男女子供も皆殺しの悲惨な事件が起こりました。昭和九年満州も博儀が皇帝となり満州国が建国された。

それでも撫順城内、奉天城内など支那街はなんとも薄気味悪く足速に歩いたものだ。

私は昭和十年京城高工鉱山科を卒業し四月より満鉄撫順炭鉱竜鳳採炭所に技術者として就職しました。竜鳳は撫順炭鉱の中でも炭質が良く、製鉄の原料炭として重要視されていた。出炭はすべて鞍山製鋼所に運ばれて関東軍も採炭計画に増産に督励し、従業員も国家意識を植えつけられ危険を犯しても、国のための観念で一丸となり働いた。メタンガスの多いことでも有名で、私も保安担当責任者となったことがありました。が、坑内火災、爆発、救命作業などで、あと一步であの世行きということも数回遭遇しました。上司同僚後輩と仕事の面では命令系統も異なるが、作業は高効率的に組織を通じて流れ、厳重に確実に実施され、お互いにお互いを尊重する平等の付き合いが行われていた。仕事が終わると先輩も上司も遠慮なく家族の料理で酒を飲み交し、感激して話を聞き、ますます闘志を燃したものであった。竜鳳堅坑の捲揚機はケーベシの五千四百馬力を採用し、高さ六十四メートルの捲槽の上部

に設置したので一大偉観を呈し、撫順の名所ともなつた。

私は昭和十六年一月坑内の切り羽に立っていたところ、突然足元が崩壊し下の空洞に約十五メートル落下し、腰椎二胸椎三を骨折、落ちた所から見上げたら小さな豆粒くらいの穴が見え、ほかに出る所はなし、観念していましたが、落ちたのを見ていた中国人がロープを下ろしてくれたのでそれにすがり脱出することが出来ました。本人も穴の付近に近寄ると危いのによく助けてくれたものと感謝しています。

坑内で負傷して坑内作業は無理と思われたのか、所長が本部の要職に栄転されたと同時に私も本部採炭課に技術担当員として地上勤務を命ぜられました。そして数か月経ってから世帯を持つよう所長から勧められ、私は骨折箇所を治療のため一か年の猶予をいただき、昭和十九年四月三日所長の仲人で結婚式を挙げました。当時戦況たけなわで午前中は勤務し午後拳式、翌日も午後は出勤し新婚旅行など思いもよらぬ時代でした。社宅はもらいましたが、妻の実家が私の勤務する炭鉱

事務所のすぐ近くで、実家からの出勤が多かった。

同僚も入隊のため一人去りまた一人去りの状況下で、私も覚悟はしていましたが、新婚生活二か月で赤紙が来ました。昭和十九年六月十日牡丹江部隊に入隊せよとの命令で、勝ってくるぞと勇ましく軍隊の飯を食べることにになりました。私は腰椎胸椎を骨折しているので検査で免れると思いましたが外からは見えないので駄目でした。私の妻の兄は同じ撫順炭鉱に勤務していて同居していましたが、偶然のいたずらか令状が来て私と同日に別の隊に入隊しました。私が入隊したのは東満の牡丹江にあった迫撃砲部隊でしたが、専ら自動車の運転の訓練でした。車種は日産、トヨタ、フォードのトラックでしたが燃料は薪で馬力は劣り始動が大変でした。運転台に乗るのも軍隊式で、部品の名称も外国語は使えず、例えばハンドルは転把、ギヤーは差動機、前照灯前輪後輪変速器など。無灯火運転は山の上から運転して下りる訓練で、前方に白い看護衣を着たのが誘導しました。東満の国境部隊に食糧その他の運搬も致しましたが、薪自動車坂を上る時

は苦劳しました。零下三十度のところで故障すると真っ先にラジエーターの水を抜くことでした。中を通っている水が凍って膨張し破裂するからです。エンジンが動き出すと雪を解かして水を作り注入したものです。極寒のころはクランクの中の油も凍るので、炭団で下から温めて油を溶かしてからでないとは始動できなかった。

昭和十九年の秋には関東軍のほとんどが南方に移動し、外国からも恐れられていた関東軍は満州から姿を消し、残ったのは武器も持たない年老いて使いものにならない私らだけになりました。小銃もなく銃剣術の棒で訓練でした。国境の部隊に木製の高射砲を運んだこともありました。各部隊の残留兵を集めて新しく自動車隊が編成され物資の輸送をしていましたが昭和二十年四月ころ間島市の部隊に移りました。ここは鮮人が多く台湾、沖縄に敵が上陸した時には各地で花火が打ち上げられましたが、我々は何の花火か分かりませんでした。

昭和二十年八月十五日天皇のご詔勅を宮庭で聞きま

したが、だれもデマ放送だと言つて信じませんでした。

しかしその翌日になりソ連が参戦し戦車が進攻してくるとの情報が入り、迎撃のため橋の上にはトラック二台を横転させ、大きな丸太を倒し、私たち四人には橋の前方で箱地雷をかついで、戦車に飛び込むようという命令でした。道路の両側に二人ずつ自分でスコップで穴を掘り待機していました。川の土手には全員二百人ぐらいが手榴弾を持って待機しており、私たちが戦車に飛び込まなくとも後から手榴弾が飛んでくる状況でした。雨が降り出し真っ暗の中震えておりました午前三時ごろになって、自動車の運転が出来る者に集合命令が下り、私は部隊長を乗せて先頭を走り十五台くらい後続しました。雨は降るし後続車はバラバラでした。夜が明けて順調な運行となりました。昼ごろにどこか知らない目的地に到着しました。

部隊長だけ降りて全員は原隊に帰れとの命令で引き返すことになりましたが、途中私の車のみ故障し動かなくなり、日が暮れて暗くなり修理も出来ないのので翌朝まで待ち修理しました。ようやく動き出し部隊に

帰った時はソ連軍に占領され、日本兵は軍服を脱ぎ肌着だけの姿でした。その時私の判断は「ソ連軍の捕虜にはならん。馬賊になってソ連軍と戦う」という信念でしたので、回れ右して営門を通り抜け長白山に向かいました。

運命の別れ道は部隊長の逃亡に始まり、自動車の故障、脱走と続きましたが、途中助けを求めた日本兵十人くらいと同僚トラック一台が行動を共にすることになり進行中、ソ連軍の命令で部隊前にうず高く積まれていた小銃、弾、防寒外套、毛布、防寒靴、大鍋、食糧等積めるだけ積んで長白山へ。ソ連軍に発見されなかったのが不思議でした。

頂上から眺める樹海はすばらしく満州広野とは知っていましたがこれ程の大森林地帯があるとは、王道楽土と言われていたゆえんもうなずけます。通化に關東軍の本営を設け徹底抗戦すべく地下壕が建設されていて、それに使用する木材を昭和二十年一月大演習と称してこの地方の木材伐採輸送行動があり、駅より列車で通化に運んでいました。頂上付近には湖があり炊事

の水には困らないし、ソ連軍の行動を監視していましたが、徒歩で登ってくる兵より日本の敗戦は間違いないことを知り、皆で今後の行動について協議しました。

満州の家族のもとに帰る組と朝鮮經由日本へ帰る組とに別れ、運転出来る者は二人、私は新婚の家族のもとへと思っていましたがかかわらず、朝鮮經由の車を運転することになりました。これより北鮮の逃避行が始まりました。山を下り東に向かい快走し凶們の鉄橋を破壊寸前に渡り朝鮮の地に入ることが出来ました。振り返ると鉄橋付近には黒煙が上っていました。途中邦人は茂山に集結すべく徒歩で遠い道を歩いていましたので、乗れるだけの人を乗せて茂山に到着しました。多くの避難民が荷物一つ持って列車に乗るべく集結していました。

軍人はすべてソ連軍の捕虜になると聞かされ、来た道を引き返しました。そして途中事故発生、私の居眠り運転が原因で、アッ、と思った瞬間右の前輪ががけ下に落ち大きく傾きましたが、残り三つの車輪は路上にあったのが幸いでした。荷台には十人くらいの同僚

が乗っていて私と共に一卷の終わりになるところでした。垂直のがけで五十メートルくらい下に青々と河が流れていました。河は蛇行していて何千年もかけて浸食された地形で景観を呈していました。同僚が近くから牛をつれてきて車を引かせ、私が運転台に乗り人牛一体となり無事引揚げる事が出来たが、車は傾いており生きた心地がしなかった。

景山鎮より南下して元山の方向に走りましたが、途中でソ連軍が海上より進駐してくると教えられ、又引き返して別の道を走っていましたら、車の交差も出来ないくらいの狭い道でバツタリ、ソ連軍の隊列に出会いました。私の車には同僚も十人くらい、小銃、その他軍用品が乗っており、ここまで来て捕虜になるものか、と助手と二人で反対側の運転台より飛び降りました。実は後尾にバスがついていて兵隊はその中に収容されていて、私にはトラックで進駐するように言われました。鮮人の通訳が私たちが日本兵であることを相手に密告していました。撃たれなくて助かりました。

それからは徒歩の旅となり、トーモロコシ、カボ

チャを食べ、昼は山道を登り、人家近くは専ら夜行でした。途中避難中の数家族と同行することになり私が先導でした。同行者の中には鮮語の達人な人もおり、又朝鮮の子供は日本語の教育をしていたので道を聞けば教えてくれ、どうにか南に向かって歩きまわりました。ある所では山に向かって歩いて登りましたが、全山背丈くらいの松が植林してあり道と言えれば猪の通った道で進む方向が分からず、ついに夜になって夜宮、狼の遠吠えを聞きながら一睡も出来ずの時もありました。どこに降りてよいやらも分からず、低くなっている所を選び降りたところが、鮮人に見付かりサイレンを鳴らして住民に知らされ、持ち物を調べられたりソ連軍に渡すと脅かされ、中には日本の軍隊で鍛えられ復員した者もいて、水を飲まずなと叫んでいた。

北鮮は岩山が多く田んぼも少なく食糧は乏しく、田舎での主食は粟、玉蜀黍、ヒエなどであった。私は六十五日歩きましたが、幸い同行の家族の持ち物を宿のお礼や食糧費に充ててもらい、五日くらいは野外でしたが、ほとんど屋内に泊まることができました。景色

の良いところもたくさんあり、黄海金剛では紅葉が格別でした。下流から山を登りはじめ水の無くなる所の頂上近くが紅葉の名所でした。ケーブルカーに乗り、降りた所が松崗里発電所で興南窒素肥料会社の電源であり、この水力発電は黄海に流れていた河を堰止め、日本海の方に水を流し、発電の用水とした所で、日本人の旅館があり大変お世話になりました。息子が軍隊から未だ帰らないからと言って頑張っておられ、私たちに衣類をたくさん下さいました。出発しようとしていた時ソ連の兵士が数人侵入して手当たり次第持ち去りほとんど無くなったところに群衆に何でも持って行くよう命じて立ち去りました。路上で売っていた果物なども金も払わず食べてしまいました。私たちは床下に隠れ難を免れました。旅館のご主人がお気の毒でなりません。どうされたことや。衣類は食糧と交換する貴重品で私は洋服布地をもらいました。

朝早く旅館を出発しましたが朝鮮人が、布地を分けとくれとどこまでも離れずついて来るので残念だがくれてやりました。昼は山登りばかりでしたが、頂上に

着くと男は衣類を脱ぎシラミ取りが始まりましたが、女性は脱ぐことも出来ず気の毒でした。いよいよ三八度線が近づいたころ鮮人の案内人が現われ、金をくれたら案内すると言うので皆で有り金をはたいて頼みましたが、いざ近づくと逃げてしまいました。向こうに見える山は以南と聞き走りましたが、鮮人がソ連兵の歩哨のおる方向を教えてくれ、ようやく三十八度線以南に突破出来ました。

そこより西方へ歩き無事汽車の出る海城に着き、駅前の掃除を命ぜられました。駅の構内で一泊し、翌朝海城駅を出発し京城に着くことが出来ました。一緒に苦労した同僚は京城でバラバラになり、私は南山麓の邦人宅に割り当てられ、何日振りかで入浴し生き返った気持ちを感じました。翌日宮崎県人を探していると連絡があり事務所に向きますと、母を連れて宮崎県高鍋までと頼まれ、私も内地に帰りたいので承諾しました。結局私は荷物の大きいのを二個と婆さんの運搬人でした。釜山に着き順調に乗船出来て仙崎に上陸、懐かしの日本の地を踏むことが出来

ました。婆さんを見失うまいと心掛け、混雑する列車を乗り継ぎ高鍋駅で婆さんと荷物を降ろし、宮崎駅に着きました。

郷里に早くと思いましたが台風のため列車もバスも不通で、三日目ようやく郷里に帰り着きました。敗戦後の日本はどこも同じで、食糧は乏しく、働く場も無い時代で、水産関係の会社員で働く傍ら在外同胞引揚者協会に事務員として勤め、引揚者の援護業務に携わりました。その後役所で働くこととなり、引揚者に対する二回の特別交付金、支給業務も私が担当し、今でも引揚者の老後の幸福を念じ心を配っております。

我が職場の戦前戦後

撫順炭田は古城子から東の竜鳳坑まで約十七キロ南北約四キロで、炭層の厚さは西部で百二十メートル、最も薄い東部で十五メートルくらいで、西部では露天掘り、以東は坑内採掘が行われていた。炭質は粘結炭で、特に竜鳳坑は強粘結炭で製鉄用炭として鞍山製鉄所にその全部を供給していた。竜鳳採炭所は東西三キロの間を三坑により採炭していたが、浅部採掘は終わ

り、一九三六年竜鳳大堅坑の開発が完成し採炭を開始した。昭和十九年に入ってから戦局は全般的に悪化し、満州も米空軍の爆撃を受け、戦火が初めて満州に及んだ、重化学工業地帯撫順にも当然空襲はあるものと予想し、各地に防空壕が構築されはじめた。昭和二十年春ごろから戦況は急激に悪化し、敗色濃しとの情報も入ってきたが、真相を知ることではできなかった。しかし現場満人の動向に戦況を反映する様子が、ありありと伺えるようになった。

一方大規模な召集が行われ、竜鳳においても社員の応召が相次ぎ業務に支障をきたすほどであった。関東軍の精銳がすでに南方各地戦線に転用されていたことも察せられた。五月ドイツ降伏後の緊迫した情勢下、軍からは石炭の増産、輸送確保の要請あり、炭鉱全社員一丸となって増産に取り組んでいた。

ソ連参戦、八月九日朝、臨時ニュースでソ連空軍の爆撃や戦車を伴う大部隊が各方面より国境を越えて侵入しつつあり、関東軍は満州軍と協力随所でこれを迎撃激戦中であるという発表であった。日ソ中立条約を

一方的に破棄してのこの侵入は大きな衝撃を与えた。出社した全社員に対し全炭鉱が臨戦体制に入る旨を告げられた。やがて全社員に対し老幼婦女女子を通信方面に疎開させる旨の軍命令が出たとして、その準備をするよう指示がなされた。実は残留関東軍の長白山脈周辺への集結、軍司令部の通信移住、満鉄首脳部の移転が行われていたのである。

この時点において撫順炭鉱全社員及び家族は通信またはその他の安全地域へ疎開せよ、と電報による総裁命令が再三再四にわたり督促されていたようだ。炭鉱においては緊急幹部会が開かれ、今後対処すべき基本方針について真剣に討議がなされ、その後すべてこの方針に基づいて行動処置されることになったのである。一、軍及びそれに基づく本社指令による在撫邦人約四万人の疎開は、炭鉱施設を離れては社員の存在意義なしとしてこれを行わない、なお巨大な資材物資運搬の面からして到底困難である。ただ撫順が戦争となった場合のことを考慮し、雨露をしのぐ天幕食糧など若干の緊急資材を準備する。

二、生産その他施設は、万難を排してこれを保全し、極力生産を続ける。例えば坑内は日本人社員によって通気、排水を確保し、爆発、水没を防止する。

三、治安対策上、華北よりの特殊工人、現地徴用の満人勤労隊を直ちに帰郷させ、一方治安確保のための自警体制をとる。

四、最悪の事態に備え、全社員家族の自決薬剤（青酸カリ）を準備する。

以上の各項の結論を得るまでには疎開の是非、生産設備保全の可否、玉碎論等討議がなされたが、結局生産を続行して最後まで設備を死守する。それを離れて社員の存在価値なく、またそれこそ社員家族を真に生かす道であるとの基本認識に一致し、そのためのあらゆる具体的措置が講じられ、最悪の事態の処する覚悟をも固めたものである。この大方針は撫順炭鉱家族のみでなく、全撫順在住日本人、及び撫順外滿鉄社員とその家族、更に全滿よりの日本人疎開者を救う最大の要因となった。在留地を着のみ着のまままで南を向けて逃避行を始めた人たちは、撫順に行けば働いて何とか

やれるという話が伝わったからだ。また二万余の徴用農民を最大限の待遇を以て帰郷させた措置が治安維持に果たした効果はこれまた大きなものであった。

八月二十七日ソ連軍は戦車隊を中心に戦闘部隊が撫順に到着し、日本軍は武装解除され、ソ連軍が警備を交替した。現地中国人の暴動、略奪が始まったが、在留邦人の自警団によりこれを防ぐよりはかはなかった。ソ連軍の日本人宅襲撃も同様であった。戦闘部隊に続いて駐屯部隊も続々と到着、炭鉱本部、各事業所に入る。十月末には中国長春鉄路公司に移管されたが、実質翌年一月末迄はソ連軍の管理であった。ソ連軍炭鉱管理引揚げ後は、中共軍が行うも、三月下旬には国府軍の進駐となり、四月十日には国府側接收委員による管理となった。ただし昭和二十三年十一月には再び中共軍の進出となるのである。このような占領者交代の無警察状態の度毎に、暴動略奪が繰り返されたのも仕方のないことであった。ソ連軍は作戦上あるいは全滿生産設備撤去搬出輸送の必要から撫順の石炭石油は至上のものであった。これがゆえに在撫日本人のみなら

ず、数方におよぶ疎開者を受け入れ、生活を支えられたのはさいわいであった。占領者が交代してもこのことは変わらなかつた。ソ連軍入撫一か月後ソ連機器撤去部隊が続いて入つて来た。

ソ連軍は石炭石油の生産の強行を命ずるかたわら、在撫各企業の主要機器機械施設を解体撤去し、千二百車両にも及ぶ貨車を使用して搬出した。一番困つたことは発電所の発電機等の搬出であつた。電力不足による各坑内の排水が困難となり、坑底にあるポンプ座の水没の危機に直面、リレー式に送電し難を免れた苦勞もあつた。撫順在住以外の社員はもとより、一般疎開者の受け入れ保護に応じ万全の措置が取られた。すなわちすべて平等に待遇し、就労者は炭鉱またはソ連中共軍等の使役として就労し、その賃金は確保し、就勞し得ない人々には相互扶助をすることにした。社宅住宅は三世帯四世帯が入居し、学校、料亭、公共機関にも収容した。

嚴寒期を迎え最も恐れていた発疹チフスの発生となり、防疫関係者必死の努力の甲斐もなく、蔓延となり

極度の疲勞、栄養失調、体力抵抗力のない人たちにも襲いかかつた。火葬が間に合わず遺体は庭に積み重ねられ後日合同火葬されるという悲惨さであつた。疎開者受け入れ数は四万八千人、死亡者一万人に及ぶと記録されている。竜鳳探炭所にも二千人程の疎開者が在住され、作業労働に慣れぬ仕事に就勞されていた。この人たちの苦勞話は実に悲惨そのもので、裸の身一つだけが生き残り、荷物、着物はもち論のこと、手をひいている子供、抱いていた子供も残らない、体力のある大人だけが生き残ることが出来た逃避行、涙なくしては聞けない。

昭和二十一年十月ころから留用解除者の引揚げが開始され、無蓋貨車で出発することになった。雄飛の夢を抱いて大陸に渡り、特に二十年あるいは三十年と長い間苦勞して年を重ねた方々がリュックサック一つで出発される姿は、敗戦という冷徹な現実を改めて認識された。引揚げ計画は順調に行われ、北滿北鮮からの疎開家族や応召留守家族、一般市民、在来撫順社員及び家族の順で、昭和二十一年六月より十月中旬までに

撫順では七万二千五百五十五人の人が移送され、約六千人の社員及び家族が留用残留となり、これ等留用の最後は昭和二十八年五月であった。

妻の家族の戦前戦後

私は昭和十九年四月三日結婚し、二か月後の六月十日に現地召集により入隊、昭和二十年二月長男出生、戦争及び敗戦のため日本に引揚げるまで、家族と会うことは出来なかった。妻の母方の祖父は台湾総督府が出来た時に役人として台湾に渡り、明治三十年に母は生まれた。その後総裁だった後藤新平が初代満鉄総裁になられた時に祖父も招聘され満州に渡り、撫順炭砒の庶務課長となり撫順炭砒の基礎を築いた。父方の祖父は家族を長野県松本に置き、満州に渡り学校長として単身赴任している。父は旅順に中学校が出来た時に松本中学校から転校し、旅順中の第一回卒業であった。現在の大阪工大を卒業して満鉄の地質調査部に勤務し、仲人でもある木戸忠太郎（木戸孝允の息子）と共に満州の地質資源の開発に従事、特筆すべきは鞍山付近の千山鉄鉱山の発見、開発で鉄鉱は良質で無尽蔵、鞍山

製鉄所の基礎を築いた。

その後父は祖父と協同して撫順に南満火工品会社を作り、後に日本火薬が買収に来た時に会社を辞し、大久保鉱業所を自営、螢石、シャームットその他の鉱業を営んだ。妻は大正十一年大連で生まれ、小学校一年生の時に撫順に両親と共に居住し育った。終戦直前は私も妻の兄も応召し、父は普蘭店の支店長が応召したので、そこへ仕事の応援に行った時に終戦となり、技術者として中共軍に連行されていた。又姉婿は満州飛行機に就職していたが、過労がもとで亡くなり、姉も同居でした。

敗戦のときは女ばかりの留守家族で、つらい日々が続いた。撫順は他地区に比べると治安も良い方であったが、万一に備え隣組からは青酸カリ入りの角砂糖が配られていた。ソ連軍は入れ墨を入れた四人が多く、いつ我が家が襲われるか戦々恐々の毎日が続いた。北満、北鮮からの難民の人たちが撫順へ撫順へと逃れてこられた。死んだ子供を背負った母親、うつろな目には涙もかれ果てた母親、顔は垢に汚れ着物物は臭くシラ

ミが縫い目にくい込んで、この世の様とも思えぬありさまだ。撫順では居留民会が発足して炊き出しや、収容は始まり妻の家にも北満から逃れてきた方が親子六人と軍隊から逃げてきた人が同居した。

昭和二十一年二月、妻の住む家も暴徒に襲撃された。中共軍が北に逃げ、国府軍が代って守備する一日前の無政府状態の時、暴動の中国人百人くらいが家を取り囲み、一軒一軒襲ってきた。二階にいた妻は逃げる間もなく、子供を背負って天井裏へ逃げ難を逃れたとか。昭和二十一年夏ころから引揚げが始まったが、終戦日はミルクも思うようになく、栄養失調と肺浸潤で、隣組の人たちと一緒に帰国出来ず、その時期の一番最期の引揚げ団体に入れてもらう。病気の子供を抱え替えて食糧と持てるだけの荷物を持って無蓋貨車で落ちないように気をつけながらコロ島に着く。乗船には二週間もかかり、待機する家はいっぱいの人で、座るだけの空間しかなかった。明日日本へ上陸するという船の中で、子供の病気が悪化し、医者からは明日までもてないと言われましたが、そのことを知った姉の友

人がそのころの新葉でトリアノンと言う薬をくだされ、飲ませましたところ、奇跡的に持ち直し、小さい命を永らえることが出来ました。自分の子供用に持っておられたもので、人の情けの尊さを知りました。

母姉妹それに妻と子の五人は無事佐世保に上陸。私の生死も判明しないので、皆で父の郷里である松本に落ち着く。中共軍に留用され残留していた父も十月ころ単身で引揚げ、又南方戦線に移動を命ぜられていた兄も終戦により鹿児島に復員、皆の消息を知り、松本で一家全員再会することが出来た。私たち家族は命あって母国に帰り着きましたが、多くの痛ましい難民の方々、又孤児の方々を思い、この方々の犠牲の上に今日の平和があることを思い感謝で一杯です。

【執筆者の横顔】

十二歳の少年、日高亮明氏は大正十五年に撫順中学一年に転入し、次いで朝鮮京城高等工業を卒業し、南満州鉄道の職員に採用なって撫順炭鉱の技術員を勤めていたが、新婚生活二か月で、昭和十九年召集となり、

翌二十年八月、日本敗戦で滿蒙の天地動転、幾度か死

線をさまよい、危険を冒して満州から北鮮を潜り抜けて南鮮にたどり、ようやく生気を取りもどして日本に引揚げられた。世に珍しい運の強い男である。

しかし、彼は運が強いだけではない。南鮮から日本まで見ず知らずの老婦人の家族を連れて荷物を二個も背負い一緒に引き揚げに協力したことは、あの戦乱の焦熱地獄の場で実践されたことは正に神や仏の仕業である。こうした涙ぐましい情念の日高氏である。

少年時代より今日まで、満鉄の対滿開発事業は、北歐開発に似たる偉大な繁栄しているさ中にも、奥地から馬賊の跳梁にも遇い、ひいては満州事変から、博儀皇帝の満州建国へと滿蒙天地の有為転変の現実に遭遇し、肌身に体験しておられながら、決して自ら誇ることのない謙讓の士である。

かつて引揚者県連合会の団体運動は藤浦会長亡き後は、有名無実化したのを憂い、日高氏は県当局や同志と相協力しあい、宮崎県連を建て直されたことは彼の人物によるものである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

私の戦争体験

沖繩県 平良 武雄

日本政府は移民を奨励していた時分だったので、私は昭和十七年にお国のために、食糧増産の先遣隊として満州に派遣してもらった。

しかし、満州でソ連軍の不法侵略にあい、戦争となり、男性は十八歳から五十歳まで、ことごとく召集をうけて、のこった婦人、子供、老人ばかりになったので、言葉に絶する惨状となった。塗炭の苦しみとはこのことと思う。

私は軍人に召集され、軍務に服していたが日本敗戦となつてから、ソ連軍に逮捕され、捕虜としてシベリアに抑留となつて惨憺たる目にあつた。幾度か死に直面したが、不思議に生きて舞鶴港に引揚げた。